

学業成績追跡調査結果報告【概要版】

駿河台大学 IR 実施委員会

1. 目的

大学入学後の学業成績について、学生の状況を検証するとともに、カリキュラム改革や教育方法の妥当性を検討するための基礎資料として活用することを目的に、履修動向、G P A 順位及び単位修得状況について追跡調査を実施し、その結果を報告する。

2. 方法

- (1) 対象：現在の 5 学部体制が確立した 2009 年度以降の入学者のうち、2015 年度までの学部新生 7 年分・6,676 名を対象とした。
- (2) 対象成績：対象科目は G P A 対象科目（卒業要件科目）とし、教職・資格課程科目は除いたが、資格取得・留学による認定単位は含んだ。なお、4 年次の成績は入学 4 年目の成績のみを対象とした。

3. 履修動向調査結果の概要

- ① 半期科目増加や学部の履修指導により、2013 年度以降の入学者における履修動向が変化している。
- ② 法・経済経営・現代文化学部の 3 学部は低学年での履修登録単位数の多い者の割合が高く、メディア情報・心理の 2 学部は低学年での履修登録単位数の多い者の割合が比較的低い。
- ③ メディア情報学部の 2 年次は、登録単位数が少なく、その分 3・4 年次の登録単位数が多い。
- ④ 現代文化・心理の 2 学部は、履修登録単位数と修得単位数の差が少なく順調に単位を修得している。

4. G P A 順位調査結果の概要

- ① 2 年次における G P A 順位は 1 年次 G P A 順位との相関が強い。
- ② 累計 G P A 順位における 1・2 年次の成績の影響が大きい。
- ③ 1 年次の成績が良い者＝卒業時の成績が良い者である。
- ④ 1 年次に躓いた者については、2 年次以降で挽回した者が少ない。

5. 単位修得状況調査結果の概要

- ① 累計修得単位数は 1・2・3 年次における修得単位数との相関がある。
- ② 2013 年度生については、カリキュラム改革、教育改善の効果があり、改善傾向が見られる。
- ③ 1 年次の修得単位数に応じて卒業率・在学率・退学率が変化する。
- ④ 1 年次に躓いた者については、2 年次以降で挽回した者が少ない。

6. まとめと改善案

これらの結果から、修得した成績の質について検証を行う場合、G P A による方法が有効であること、中途退学防止の観点からは、特に 1 年次における単位の修得状況に応じた指導が重要であることを確認した。また、今後に向けて、1 年次の成績が良い者の要因を検証するためには、入試方式、高校評定値及び入試成績等との検証を行うことが有効と思われる。

改善案として、① 1 年次で躓かないようにする仕組みの構築、② 1 年次の学期半ばにおける中間評価の実施（疑似クォーター制度）、③ 1 年次で躓いた者が挽回できる仕組みの構築が必要である。

以上